

桜蔭俳話会 十二月句会 (第二九二回) 桜蔭会館

平成二十二年十二月十九日

- 2点①知らぬ間に熊は星座へ戻りけり 守 散る紅葉諸手に受くる幼かな 友子
- ①嫁がせて独り言増ゆ枇杷の花 友子 急坂を登り加わる落葉掃 眞三
- ①コンスリーブ駁る十二月八日かな 貞勝 街路樹を裸にしたり冬嵐 溪水
- 2点 古民家を守るは婆なり冬帽子 友子 スキー行へ小さな寄金交通遺児会 幸
- 千両や小鳥呼び込む美の赤き 溪水 クリスマス近づき瓶に小銭充つ 貞勝
- くさめより夫のひと日の始まりぬ 友子 吹く風に少し遅れて散る紅葉 守
- ありふれし家庭天皇誕生日 守
- 落葉舞ふ課外授業の小学生 秀一
- 1点①年の瀬や信号のなき地下の街 守 不在投句 (瀬戸溪水、野上貞勝)
- ①陽のあたる段に墓ありみかん山 ヤエ子
- ①雪嶺や還暦過ぎし山男 友子
- 1点 雑踏や手ぶらの我の十二月 秀一
- 丹の褪せし円柱の影日短か 貞勝
- 威儀正す騎馬像囲む枯木かな 秀一
- 暮の街歩き昼餉は Pasta にす 眞三
- 小春日や子ら鉄棒をぐるり舞ふ ヤエ子
- 冬夕焼飛行機雲を朱に染めて 溪水
- 霜白く小石重ねて主従墓 幸
- 蒼天の枯木に巣箱残りけり 秀一
- 歳晩や橋詰番の直立す 秀一
- 冬ぬくし微笑みかける地藏さま 溪水
- 見るだけの宝石売り場年の暮 眞三
- ※ 乗り慣れぬバスどこへ行く寒昂 ヤエ子
- 塾の子で溢るる駅頭暮早し 貞勝
- 負け将棋秋茶一服駒を読む 幸
- 欠礼の挨拶状や年暮るる 溪水
- 笑みこぼる暮のサービス和菓子売り 眞三
- 風切って坂駆けくだる年の果て ヤエ子
- 秋冷や注射器のぼる輸血かな 幸
- 水葬のごとく冬蝶水の上 守
- 長生きをしたく心ず年惜しむ 眞三
- 村地藏帽子セーター纏っており ヤエ子
- 秋夕焼この空の果てテロ絶えず 幸
- ポインセチア緋が朝市のとばぐちに 貞勝